

祈りの家

実のない無花果

マルコによる福音書 一一・二二―一九

沖村裕史

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

に来た人々のために便宜を図ることによつて、細々と生活の糧を得ていたに過ぎません。「売り買いしていた人々」も、祭りでご焼きを食べる人や土産物を漁っている人々ではなく、掟に従って巡礼の旅をようやく終えて、神への礼拝をささげようとしている人々です。

ここには、ふたつの出来事が描かれています。まず、いちじくの話です。これもまた、奇跡物語のひとつですが、イエスさまのなさった他の奇跡とはかなり異なっています。言うならば、裁き、呪いとしての奇跡です。このいちじくの木が、何か悪いことをしたというわけではありません。ただ、実がなかっただけです。しかし、イエスさまは、実のなる季節ではないにもかかわらず、実らぬいちじくの木を呪い、枯らしてしまわれました。

いったいこのいちじくの木の話は何を語っているのか。それを考えるための手がかりは、密接に結び合わされている、もう一つの出来事、「宮清め」と呼ばれる一五―一九節にあります。エルサレムに來られたイエスさまは真つ先に神殿にお入りになりました。そこでイエスさまがご覧になったのは、売り買いしている人々であり、両替人や鳩を売る者たちの店でした。こゝを讀むと、イエスさまに似つかわしくはないが、お怒りになるのも当然だ、礼拝の場を商売の場所にしてしまうとは、何とも不謹慎だ、そう思われるかもしれません。しかし、それは誤解です。商売をしている人は、礼拝

ところが、そのような人々をイエスさまは追い出し、その台や腰掛けをひっくり返されました。そして、こう言われました、「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人々の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしてしまった」。この神殿が今や、祈りの家ではなく、強盗の巣になってしまっている。礼拝が行われなくなっていたわけではありません。毎日、沢山の動物が犠牲としてささげられ、多くの献金がなされてきたのです。形の上では、まことに正しい、立派な礼拝がなされてきました。しかし、それを「強盗の巣」と呼ばれたのです。それは単に、形だけで心が込められていない、というだけのことではありません。「強盗」という激しい言葉は、それ以上のことを意味します。

イエスさまが見つめておられたのは、人間の食欲の罪です。礼拝が、食欲、貪りの場になってしまっている、と言われるのです。ここにある「神殿の境内」とは「異邦人の庭」のことです。神殿は、中心である聖所を囲む幾つかの庭からなっていますが、一番外側にあるのが「異邦人の庭」でした。

問題は、その境内で商売がなされているのはけしからんというようなことではなく、「すべての国の人々の祈りの家と呼ばれるべき」神殿に集まっている人々が、どのような思いで礼拝をしているか、ということでした。ユダヤ人たちは、律法に基づく正しい捧げものをして礼拝することによって、自分が神をちゃんと礼拝している、正しい者であることを確認し、それによって平安と慰めを得ていました。そのように、自分の正しさを確認することで、平安や慰めを得ようとする礼拝をささげていく中で、彼らは、その礼拝に共に集っている他の人々、異邦人たちの礼拝の場が喧噪の場となっていて、何の問題も感じないで、様々な弱さや苦しみをかかえて神の救いを切実に求めている人々のことが、目に入らなくなっていたのです。

実際に、いちじくの木の出来事にも、それと同じ食欲が表れていました。一二節に「翌日、一行がベタニアを出るとき、イエスは飢えておられた」とあります。ベタニアという町の名は「悩みの家」「貧困の家」という意味です。その「悩みの家」「貧困の家」に上がり込んで、ご馳走になろうなどとイエスさまはお考えにならなかつたに違いありません。受難週、イエスさまがベタニアからエルサレムへと毎日のように通われたその歩みは、穢れた罪人として蔑まれていたであろうベタニアの人々の悩みと屈辱を背負われる歩みであり、その飢えを背負われる歩みだったので、その途上に、葉のよく茂ったいちじくの木がありました。飢えた者にその果実を提供することなく、見栄えだけは芳しい、いちじくの木です。

イエスさまはそこを何をご覧になったのか。そのいちじくは、欺瞞に充ちたエルサレムの象徴である、と言うのはたやすいことです。しかし、そこにわたしたち自身の

姿を見ないわけにはいきません。イエスさまはそのいちじくに、呪いをぶつけられます。ベタニアの嘆き、悲しみ、怒りをぶつけておられるのです。富む者がますます富み、貧しき者がますます飢えて死んでいく時代、この世界のただ中であって、イエスさまが葉ばかりよく生い茂って、飢えた者を養う実りをつけることのない、いちじくを呪われたことを、我がこととして受けとめたいと願います。「まだ、いちじくの季節ではない」「わたしにはまだそんな力はない」などと言わないで、今できることをもって、ベタニアと共に飢えておられるイエスさまにお仕えしていきたい、そう心から祈り願います。そしてそのような祈りこそが、わたしたちの礼拝が食欲に支配された強盗の巣にならないために必要なことでした。

イエスさまの期待する実をさせることのできなかつたいちじくは、イエスさまに呪われて枯れてしまいました。そこに、神の選びと召しにもかかわらず、神の民としての礼拝に生きようとしないう者への神の怒りと裁きが示されています。そして、わたしたちはまさに、その怒りと裁きによって、このいちじくの木のように呪われ、滅ぼされてしまふしかない者です。しかし、その神の怒りと裁きをわたしたちに代って背負い、引き受けてくださるために、イエスさまはこのエルサレムに來られ、十字架の死と復活への道を歩んでくださったのです。神の民としての礼拝に生きるのではなく、食欲に支配され、強盗の巣になってしまっているわたしたちの罪を、イエスさまはご自分の身に背負ってくださり、二人の強盗たちと共に十字架にかかって死んでくださり、よみがえられ、今もここにもとにいてくださる恵みをお示しくださいました。

（二〇一五年五月一〇日、復活後第五主日・母の日礼拝）